

平成24年度長期研修生 研究報告概要

鳥取県教育センター情報教育課
長期研修生 岩美町立岩美北小学校 澤田 智志

1 研究テーマ

ICT を有効に活用した外国語活動の授業の展開・指導方法の工夫

2 はじめに

ICT の有効な活用は、多くの授業で可能であるが、それは、確かな指導力と組み合わせることで効果がある。そこで、平成23年度から実施されている「外国語活動」における ICT の有効な活用方法を検証とは何かを研究した。

3 研究目的

教科指導における有効な ICT 活用を通して、
積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を目指す。

(1) 目的について

外国語活動においては、「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさ」を体験させることが大切である。(図1) ICT を有効に活用することで、「使える外国語を駆使し、互いに思いを伝え合い、コミュニケーションを図る楽しさを味わうこと」がより可能になる。その「楽しさの体験」は、そのまま「積極的な態度の育成」につながり、学習目標が達成できると考えた。

(2) 背景について

教員の ICT 活用指導力は「すべての教員に求められる基本的な資質能力」である。(教育の情報化に関する手引、文部科学省) 各教科等の指導に当たっては、「視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること」とある。(小学校学習指導要領第一章総則) また、菅正隆氏(前教科調査官)は、「外国語活動での ICT 活用が、ICT 普及のきっかけになり、興味や関心を惹きつけ、顔を見ながらコミュニケーションがとれる」と述べている。このように授業における ICT の有効な活用がいつそう求められている。

(3) 本校の研究主題との関連

本校児童は、素直で明るく好きなことに一生懸命になれる児童が多い。一方で、主体性の弱さ、コミュニケーション能力の低さなどの課題もあった。本校の研究の取り組みで一定の成果が見られたが、「自分の気持ちを言葉で正しく伝える」といった点では、依然として課題もある。平成24年度本校の研究主題は、『『できる喜び』『わかる喜び』を感じ取り、自信をもって表現できる児童の育成』である。外国語活動の目標は、「(前略)積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、(中略)コミュニケーション能力の素地を養う」である。そこで、外国語活動での取り組みは、本校の研究テーマの達成にもつながると考えた。

4 研究内容

(1) 研究方法

①理論研究・調査研究・教材開発研究・事例研究

- ・外国語活動を中心とした授業の展開・指導方法の工夫について
- ・外国語活動を中心とした ICT 活用とコンテンツ開発について

②実践研究

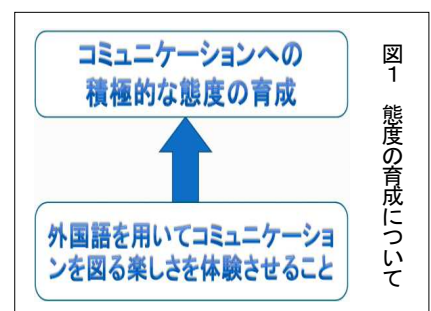
- ・所属校での授業実践とその検証

(2) ICT を活用した授業の展開・指導方法の工夫

「外国語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験させる」ねらいを達成するために、学習内容が積み重なるよう授業の展開を工夫した。例えば、「I like」を扱う単元が終わった後、その3時間後、またその3時間後にも「I like」を使用するダイアログが出てくるようにした。この方がダイアログを組み合わせて扱うことができ、聞く力・話す力が効果的につくと考えた。また、態度の段階表から毎時間児童の実態をみとりながら授業を計画した。ICT を活用して、以下の①~③を特に重視した。(図2)

①単語の効率的な定着の工夫

フラッシュ型教材を作成し、電子黒板上で映しながら口頭練習を行った。コミュニケーションにはある程度のスキルも必要である。コミュニケーションの楽しさを味わうためにも最低限の単語は定着させたい。1度で全て教えるのではなく、繰り返したり手法を変えたりしながら効率的な定着を図れるようにした。



②ダイアログの状況設定と意味理解の工夫

ダイアログが使われる状況や意味を、日本語の説明なしで理解できれば、より効率的に All English で授業することができる。映像やイラストなどを使用し、直感的に状況や意味を理解できるようにした。例えば「like」を扱う場合、「サルはバナナが好き」といった誰でも知っていることをイラストで扱う。

③活動を多く取り入れる展開の工夫

上記①②で効率的に学習できれば、コミュニケーション活動をより多く取り入れることができ、ねらいの達成につながる。その「活動の楽しさ」の中身も「ゲームやその勝敗」から「外国語を用いてのコミュニケーション」にしていきたいと考えた。形態では「ペア→班→クラス全員」へと、内容では「答えが1つ→複数から選択→自分で考え話す」といった具合に段階的に活動を設定した。

④タブレット端末での疑似体験の工夫

コミュニケーション活動でタブレットを使用することで、実際に学校外へ出ないでできないことを疑似体験できる。より本物に近い体験は、興味・関心を引き出し、コミュニケーションを図る楽しさの体験と積極的な態度の育成の両方のねらいにつながると考えた。

(3) ICT 活用とコンテンツ開発

①単語の効率的な定着、ダイアログの意味理解・状況設定での活用

②上記を中心とする授業コンテンツの開発

(4) 研究の検証

①観察(授業 VTR から)

「楽しさ」が「勝敗・ゲーム」から「会話すること」に変化してきていると考えられる。

- ・ 1 時間目・・・照れくさそうな様子や相手を見つけるのに困っている様子がみられる。
- ・ 23 時間目・・・ジャスチャーを交え互いに聞き合い確かめる様子がみられる。

「外国語を駆使し、互いにコミュニケーションを図る体験」ができていていると考えられる。

- ・ コミュニケーション活動の会話時間・・・1 時間目平均 8 秒 → 26 時間目平均 3 3 秒

②アンケート(学習意欲測定尺度、北海道大学鈴木誠氏作成から抽出)

内容理解に基づいた「コミュニケーションを図る楽しさの体験」につながっていると考えられる。

- ・ 項目「今どんな外国語活動の勉強をしているのかわかる」で「絶対に違う」と答えた児童が昨年 1 0 → 7 月 0 % に減少した。1 2 月には、「どちらかといえば違う」と答えた児童は 0 % に減少し、「分かる」「どちらかといえば分かる」が 1 0 0 % の結果を示した。(図 3)



図2 授業の展開・指導方法の工夫

5 研究のまとめ

授業の展開・指導方法を工夫し ICT を有効に活用することで、本研究の目的を達成することができた。

「授業の展開・指導方法の工夫、ICT の有効な活用」により、「学習内容の直感的理解」「単語・ダイアログの効率的な定着」を図ることができ、それが「コミュニケーションを図る楽しさの体験」につながったからである。その「楽しさの体験」が外国語活動の目標と本研究の目的「積極的な態度の育成」につながるという手ごたえが得られた。(図 1) また「All English の授業で内容を理解できたこと」は ICT 活用することで可能となった成果である。

6 今後の課題

(1) 外国語で培った児童の態度の日常生活への広がり

外国語で培った積極的な態度が他教科、そして日常生活へ広がりを見せているのかということである。児童が日常生活の会話の中で外国語を使用してやりとりをしていることがあるとは聞くものの検証はできていない。

(2) ICT の有効な活用方法の普及

ICT の有効な活用方法の普及である。外国語活動での活用法をもとに、他教科へも通じるところを紹介し、ICT のより有効利用を校内全体で図っていきたい。

7 おわりに

ICT の有効な活用は多くの場面で可能である。外国語活動におけるその ICT を有効に活用した授業の 1 つの型が示せたのではないかと考える。

今後も外国語活動をはじめ他教科も含めた ITC のより有効な活用方法の研鑽に努めていきたい。

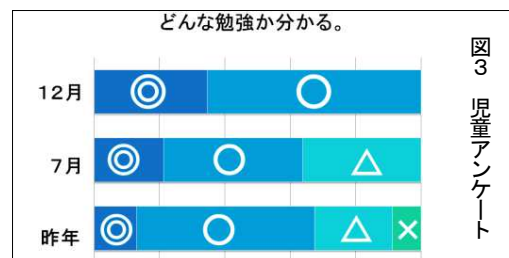


図3 児童アンケート